

平成31年度研究開発委員会指導資料説明会

報告

平成31年度研究開発委員会指導資料説明会が、令和2年2月10日に、教職員研修センターにおいて開催された。高等学校研究開発委員会の研究主題は、「カリキュラム・マネジメントの視点に立った、各教科における『深い学び』を実現するための学習評価の充実」であった。また、各教科及び教育課題の分科会に先立ち、茨木県立並木中等教育学校長である中島博司氏の講演が行われた。

(全体会)

1 東京都教育委員会挨拶

2 講演

「学力向上と探求につながるアクティブ・ラーニング—R80・T0学習・AALの活用—」

茨木県立並木中等教育学校長 中島 博司

多くのご経験や著作をもつ中島氏は、アクティブ・ラーニングに関する研究や啓蒙に長く携わっている。氏はアクティブ・ラーニングの目的を「アクティブ・ラーナー（能動的学習者）の育成」、目指すべき力を「相手の主張の筋道を読み解き、自分の考えを整理して伝える力」すなわち「読解力」と「論理力」であるとした。氏の経験から、難関大学に合格する生徒はみな読解力と論理力を身に付けており、氏はそれらの育成による学力向上を目指して「R80」「AL指数」「T0学習」「AAL」などの手法を開発されている。

中島氏が「論理力」とともにアクティブ・ラーニングの目標に位置付けるのが、「日本語の4技能」の育成である。そのため、並木中等教育学校ではアナウンサー等を講師とし、「読む・聞く・話す・書く」力の育成を図っているという。

講演では、並木中等教育学校で行われているその他の様々な取り組みが映像を交えて紹介された。途中、機材の不調にも見舞われたが、見事に切り抜ける中島氏。全国各地で多数の講演を行っているさすがの手腕が垣間見え、参加者は充実した時間を過ごすことができた。

3 質疑応答

講演内容についての質問、指導資料説明会のテーマである評価に関する質問などが見られた。また、質問者の中には都外からの参加者がおり、注目度の高さがうかがえた。

講義室へと場所を移し、数学研究開発委員会の取組について、指導資料の説明が行われた。

ア カリキュラム・マネジメントの視点に立った教科横断的な学習について

教科横断的な学習の考え方として、「他教科の内容から数学の授業に利用できるものを探す」のではなく、「現実の事象を数学の授業で扱い、現実の事象に着目して他教科の学習内容から関連があると思われるものを探す」という考え方が示された。

イ 各教科における「深い学び」について

発表では、「深い学び」は様々な視点で指導方法が研究されているが、具体的な手法を追求しても「深い学び」の実態を捉えることはできないことが指摘された。そこで委員からは、後述するルーブリックの評価基準に『「深い学び」が実現された生徒像』を示し、授業を通して変容した生徒の姿をもって「深い学び」の実現度合いを測るという視点が提案された。

ウ 学習評価の充実について

研究開発委員会には、「単元のルーブリック」の作成が課題として与えられていたという。しかし、単元として一般的な「教科書における節」という広い範囲では、ルーブリックの評価基準（規準ではない）を設けることが困難であった。そのため、委員会では「単元を節より小さい内容のまとまりとして捉える」「生徒には単元ではなく各自のルーブリックを与える」ことで具体的な基準の作成を図ったという。なお、これらの具体的な研究の方法については、東京学芸大学の西村圭一教授からの助言があることが示された。

3つの高等学校における指導事例が示された。単元は以下のとおりである。

A高等学校 単元名「2次不等式」

B高等学校 単元名「正弦定理」

C高等学校 単元名「ユークリッドの互除法」

また、それらの事例を通して研究主題に対する成果と課題がまとめられた。

成果

・グランドデザインを踏まえた授業づくりについて、数学科教員が一体となって授業の展望について議論する機会を得ることができた。(ア)

・導入課題の提示や学習内容のまとめとして数学的な見方・考え方が働くような授業を実践した。(イ)

・「各自のルーブリック」を用いることで、生徒が自身の学習段階を認識でき、復讐する項目の優先順位をつけることができた。(ウ)

課題

・校内体制の整備が不可欠である。(ア)

・「深い学び」について校内で共通理解を図り、評価基準の適切さについて常に検証する必要がある。(イ)

・ルーブリックについて、生徒・授業者ともにその目的を理解しなくてはならない。(ウ)